

チャプター① 日記／物語／勅撰和歌集／随筆

【日記】

土佐日記（紀貫之）

蜻蛉日記（藤原道綱母）

和泉式部日記

紫式部日記

更級日記（菅原孝標女）

讃岐典侍日記（藤原長子）

（成尋阿闍梨母集）

※（明月記（藤原定家）

建礼門院右京大夫集

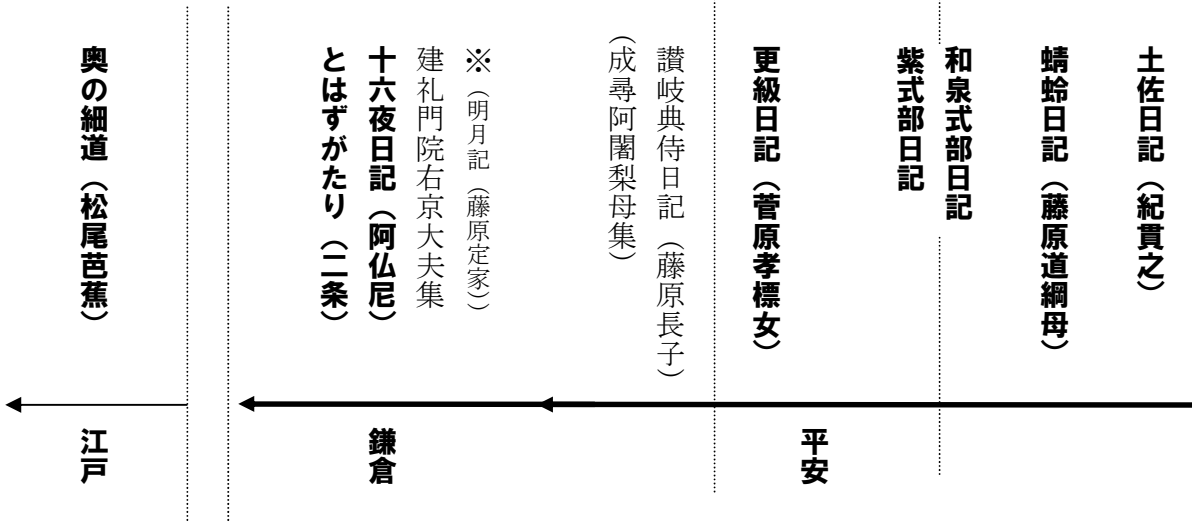
十六夜日記（阿仏尼）

とはすがたり（二条）

奥の細道（松尾芭蕉）

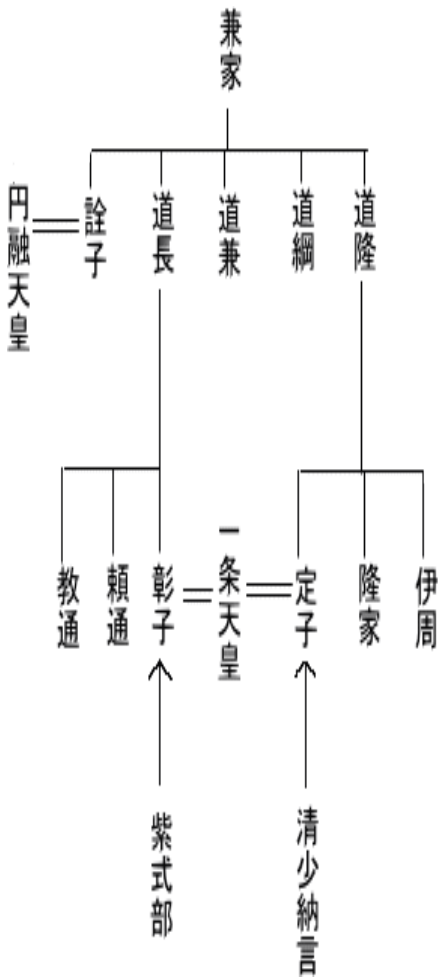
1100年

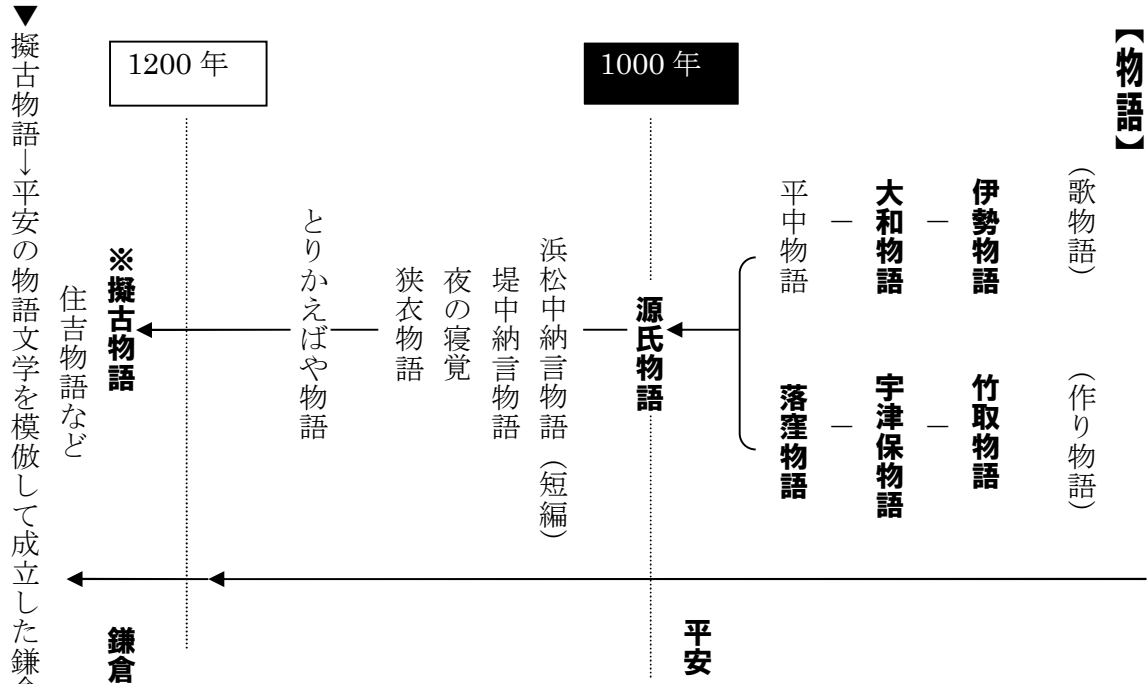
1000年



【日記文学の成立と発展】

土佐日記以前、日記といわれるものは漢文体で書かれた記録を指した。しかし、**紀貫之が『土佐日記』**の中で自分を**女性と偽り仮名で日記を書いていた**。これが仮名での日記文学のは始まりである。その後、道綱母による『蜻蛉日記』が作られ、夫兼家との不遇な夫婦生活を描かれた。平安中期になると、**和泉式部、紫式部、清少納言**と、女流作家の栄光期を迎える。彼女らは道綱母の代と比較すると孫の代にあたる。（系図で確認しよう。）平安後期になると、**道綱母の姪にあたる孝標女が書いた『更級日記』**が成立する。これは、源氏物語に憧れる少女時代、慣れない宮廷生活のこと、父の赴任先の地方での暮らしを赤裸々に綴っている。（孝標女は、ニートで引きこもり！！）鎌倉時代になると日記文学は次第に廃れていく。**息子の領地争いの調停に鎌倉へ出向く『十六夜日記』**や、**後深草院に愛された二条の『とはすがたり』**を抑えてほしい。





擬古物語↓平安の物語文学を模倣して成立した鎌倉時代の物語。（要はパクリ！）後に御伽草子に影響する。（歌物語）

【物語の成立と発展】

最古の物語（作物語）は『竹取物語』である。「物語出で来はじめの祖（源氏物語）」からもそのことがうかがえる。その後、『宇津保物語』『落窪物語』と発展していった。一方、**和歌の詞書が発展して成立したのが、歌物語である。**（作中に和歌があるから歌物語ではない！）こちらは在原業平を主人公にする『伊勢物語』最初。この二つのジャンルの流れをくんで発展したのが源氏物語である。

その後、**源氏物語を模倣した作品が多く作られた。それが、『浜松中納言物語』以下『狭衣物語』までの四作品である。**これらは源氏物語の文学性に影響されて作られた作品ではあるが、文学的価値は低い。

これらの作品は鎌倉時代に作られた「擬古物語」へと発展していった。**擬古物語とは、平安時代の物語の流れをくんで模倣した物語のことである。**いずれも文学的価値は高くない。擬古物語はやがて御伽草子へと発展していった。

【勅撰和歌集】（八代集）

900年
=土佐

古今和歌集（醍醐天皇↓紀貫之の選）

後撰和歌集（村上天皇↓梨壺の五人の選）

拾遺和歌集（花山院↓藤原公任の選）

後拾遺和歌集（白川天皇↓藤原通俊の選）

金葉和歌集（白川院↓源俊賴・俊恵の選）

詞花和歌集（崇徳院↓藤原顕輔の選）

千載和歌集（後白河院↓藤原俊成の選）

新古今和歌集（後鳥羽上皇↓※藤原定家の選）

1200年

1000年

鎌倉

平安

※複数の選者（源通具・六条有家・藤原定家・藤原家隆・飛鳥井雅経・寂蓮※完成前に没）

古今 後撰 拾遺 後拾遺 金葉 詞花 千載 新古今

覚え方

↓ 古い五千を周囲のご祝儀、金曜の齒科、洗剤新し！

▼勅撰和歌集↓天皇の命令によって書かれた和歌集。

▼私家集↓特定の人物の歌集

※和泉式部集（平安／和泉式部）

山家集（平安末期／西行）

金塊集（鎌倉／源実朝）

【勅撰和歌集の成立と発展】

天皇の命令（勅命）や上皇、法皇の命令（院宣）によって作られた和歌集。各和歌集成立に際して、有名な歌人が世の中にデビューしている点をおさえる。例えば、『古今和歌集』の仮名序の作者である紀貫之が、六人の歌の名人を論じたことから、六歌仙が確定されたことや、『後撰和歌集』の編者が梨壺五人（梨壺という部屋で編集したことから）と呼ばれ、世の中に名声を広めたり、『拾遺和歌集』の編者である藤原公任（和漢朗詠集の作者）もこれ以降に代表歌人となった。

尚、『千載和歌集』の編者である藤原俊成と『新古今和歌集』の編者である『藤原定家』は親子であり、二代で勅撰和歌集の編者になっていることもおさえておきたい。

クローズアップ【藤原俊成／藤原定家】

俊成（父）、定家（子）は親子。親子二代で勅撰和歌集の撰者となる。俊成は歌論『古来風体抄』を著し、幽玄の境地を理想とし、新古今へとつないだ。

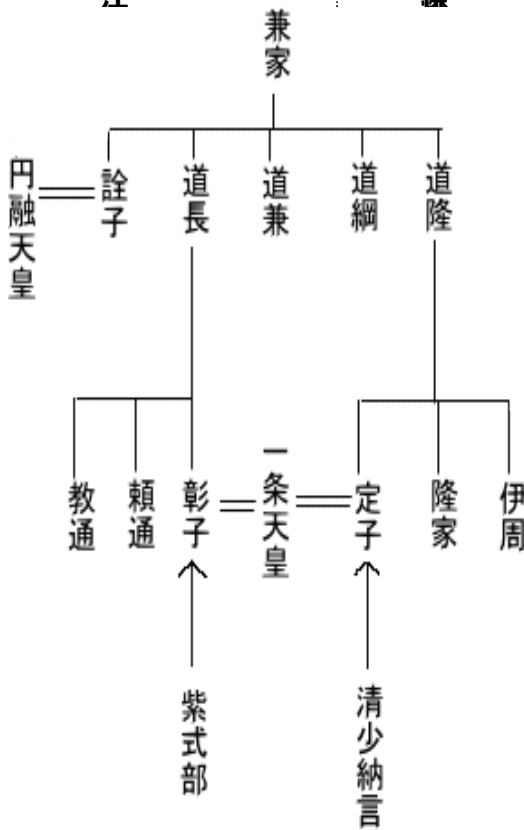
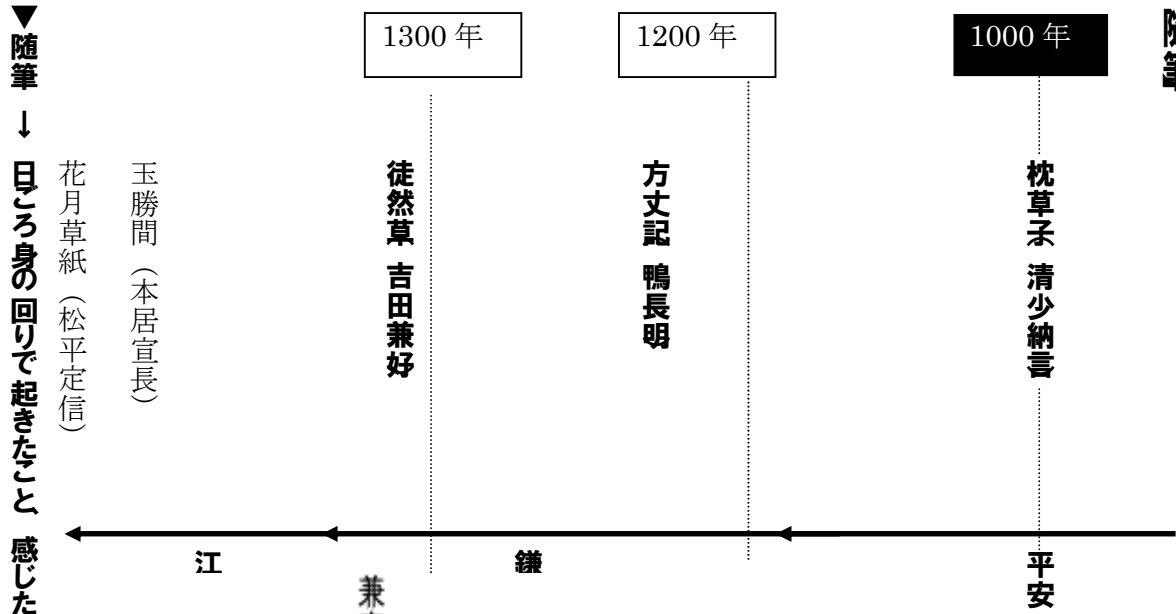
一方息子の定家は幼い頃から、父に影響され、歌道に入り、後に後鳥羽院の信任を得た。撰者となった新古今和歌集では、幽玄の流れを組み、発展させ、有心体を理想の境地としたのである。定家の著書は、歌論に『近代秀歌』、『毎月抄』自撰歌集に『拾遺愚草』、日記に『明月記』がある。



※幽玄 ↓ 優美さの中に情緒のただよう余情のこと。

※有心 ↓ 幽玄を具体的に発展させた理念。

【随筆】



【随筆文学の成立と発展】

随筆とは、作者の思いをそのまま文章にしたものと考えればよい。随筆のはじめは『枕草子』だが、『枕草子』の回想段は日記の体裁なので注意が必要。また、鎌倉時代の随筆『方丈記』と『徒然草』は成立年代に注意。『方丈記』は鎌倉初期の成立だが、『徒然草』は鎌倉末期の成立で、百年程度離れている。

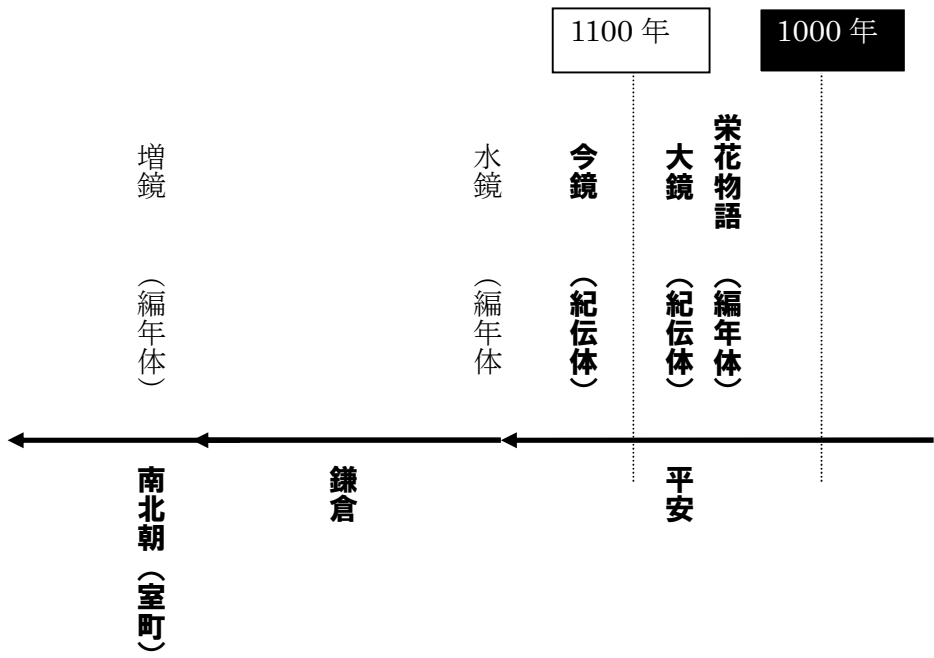
※三大随筆
『枕草子』『方丈記』『徒然草』



チャプター②

歴史物語／軍記物語／その他

【歴史物語】



▼歴史物語 ↓ 歴史の史実を物語化したもの。

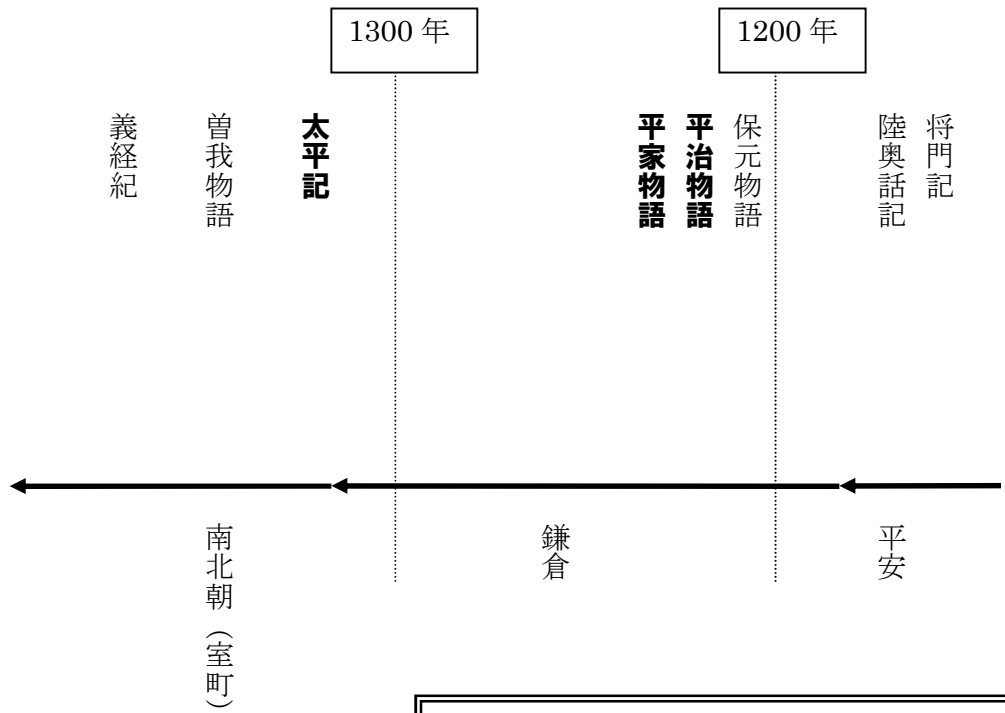
- ※ 紀伝体 ↓ 人物中心に編集する編集方法 (時代はばらばら)
- ※ 編年体 ↓ 時代順に編集

【歴史物語の成立と発展】

歴史の史実を物語にアレンジしたものと考えればよい。歴史物語の最初は『栄花物語』で、主に藤原道長を称賛している物語と考える。その後『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』と成立していく。(四鏡)。「おお！今水が増す」と覚えておこう。「事実を赤裸々に表現しています」というメッセージから「鏡」という表題になっていると言われている。(鏡は真実を映すから) 四鏡の特徴としては、語り部による語りという文体をとっている点である。したがって、地の文の多くは語り部の語りになっているので注意しよう。また、扱っている史実が一番古いのは「水鏡」である点も注意が必要。

構成は、年表通りに構成している「編年体」と、特定の人物を中心にまとめている「紀伝体」がある。尚、歴史物語の代表作『大鏡』は全体で藤原道長の批判になっているが、各セクションは称賛的な内容も多く、読解の際には注意が必要。

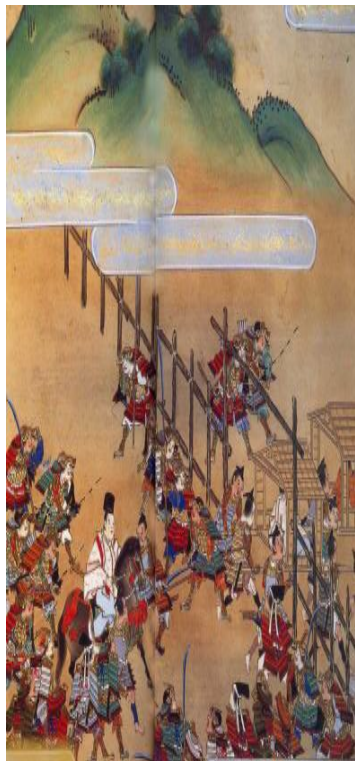
【軍記物語】



【軍記物語の成立と発展】

戦乱の世の中を客観的に描いた物語。歴史物語は凋落した貴族を中心に書いているのに対し、軍記物語は戦う武将に重点を置いて書いている。軍記物語の起ころは、平安時代の『将門記』『陸奥話記』だが、本格的に発展していったのは、鎌倉時代である。**軍記物語の代表は『平家物語』といえよう。**また、軍記物語によく使われる文法事項が存在するので注意が必要である。（受身の「す／さす」・「ござんなり」・促音便など）

難関大受験者は、平家物語や太平記の背景や人物関係なども抑えておきたい。



▼戦乱の世の中を物語にしたもの。軍記物特有の文法や語法があるので注意。（受身の「す・さす」／「ござんなり」等）

【その他の文学史】

（随評論／歌論）

新撰髓脳（藤原公任）

奥儀抄

袋草子

古来風体抄（藤原俊成）

近代秀歌（藤原定家） ※歌論

毎月抄（藤原定家） ※歌論

無名草子

無名抄（鴨長明）

花鏡

風姿花伝（世阿弥）

ささめこと（心敬） ※連歌書

古事記伝（本居宣長）

源氏物語玉の小櫛（本居宣長）



平安

鎌倉

室町

（室町／江戸、その他の文学）

【御伽草子】 ↓室町時代の短編の総称

【仮名草子】 ↓江戸時代に書かれた仮名の本

【浮世草子】 ↓江戸時代の町人の生活を書いた本

好色一代男（好色物）

日本永代蔵（町人物）

武道伝来記（武家物）

（井原西鶴）

【紀行文】

野ざらし紀行

更科紀行

奥の細道

【浄瑠璃】

曾根崎心中

国性爺合戦

冥途の飛脚

【俳諧】

※蕉門

（松尾芭蕉）

【洒落本】

【人情本】

【滑稽本】

東海道中膝栗毛（十返舎一九）

【読本】

雨月物語（上田秋成）

南総里見八犬伝（滝沢馬琴）

【草双紙】

※赤本・黒本

青本

黄表紙

★文学史展開図

